



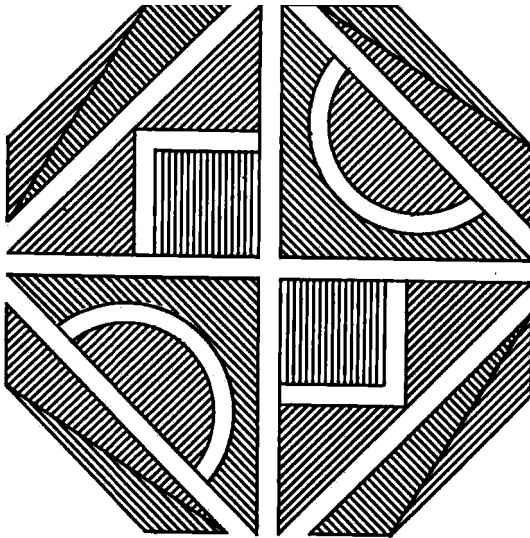
経営学の基礎研究

斐富吉著



経営学の基礎研究

札幌商科大学 裴 富吉 著
助 教 授



東京 白桃書房 神田

著者略歴

裴 富 吉

昭和44年3月 東京理科大学工学部経営工学科卒業

46年3月 中央大学大学院商学研究科修士課程
修了

51年3月 同上 博士課程中退(単位取得)

51年4月 札幌商科大学助教授

専攻分野: 経営学原理, 経営管理論, 経営学説,
労務管理論, 「経営と風土」論

著 書: 『日本の経営学』(昭52)

著者との申し
合わせにより
検印省略

昭和53年5月20日 初版印刷

昭和53年5月26日 初版発行

経営学の基礎研究

著 者 裴 富 吉

発行者 大 矢 順 一 郎

印刷者 刈 部 哲 夫

* * *

発行所 株式会社 白 桃 書 房

〒101 東京都千代田区外神田5-1-15
電話(03)836-4781(代) 振替東京0-20192

落丁・乱丁本はお取り替えます。

刈部印刷/浦野製本

書籍コード 3034-168339-6915

目 次

第1編 経営と風土の接点

第1章 経営と風土の接点(1).....	3
— 風土概念再検討への予備的考察 —	
I はじめに	3
II 風土概念について	4
III 風土概念の問題性	7
IV 日本的風土の規定	13
V 日本的風土の概念の特質	17
VI むすび——これからの課題——.....	21
第2章 経営と風土の接点(2)	25
— 風土概念再検討のための批判と評価 —	
I はじめに	25
II 風土概念の批判と評価(1)	26
III 和辻風土概念の特質と限界	31
IV 風土概念の批判と評価(2)	34
V 和辻風土概念の成果と制約	38
VI 「随所にイデーを見る目」——3つの風土類型——.....	40
VII むすび——残る課題——.....	44
第3章 経営と風土の接点(3)	47
— 風土概念の再構成と新展開に関する考察 —	
I はじめに	47
II 風土概念と歴史.....	47

Ⅲ 風土概念の動態化	51
Ⅳ 社会科学としての風土概念	56
Ⅴ 風土概念の再構成と新展開	61
Ⅵ 風土概念と日本の経営	64
Ⅶ むすび —方法と内容の統合について—	68

第2編 経営学の基礎的問題

第1章 経営学と統計	73
—企業経営における統計の意味と役割—	
Ⅰ はじめに	73
Ⅱ 経営学と統計・統計学	74
Ⅲ 経営統計学(1)	78
Ⅳ 経営統計学(2)	88
Ⅴ 統計と統計学	95
Ⅵ 2つの統計学—記述統計学と推測統計学(社会統計学と 数理統計学)—	106
Ⅶ 意思決定と経営科学と直観	116
Ⅷ むすび—直観の経営学的理解—	133
第2章 経営学と会計理論	141
—「所有と経営の分離」と「企業体理論」—	
Ⅰ はじめに	141
Ⅱ 会計理論としての「企業体理論」	142
Ⅲ 「企業体理論」の特質	145
Ⅳ 「企業体理論」の吟味	150
Ⅴ 「所有と経営の分離」(1)	159
Ⅵ 「所有と経営の分離」(2)	167

Ⅶ 「所有と経営の分離」論の展開	179
① バーリとミーンズの「所有と経営の分離」論	181
② 「所有と経営の分離」論と「制度理論」	201
Ⅷ 「所有と経営の分離」の日本的形態	213
Ⅸ 経営と会計	249
X むすび	263
第3章 人的資源会計の経営学的考察	269
I はじめに	269
II 人的資源会計とはなにか	271
III 人的資源会計と付加価値会計	280
IV 人的資源会計の課題	289
V 人的資源会計登場の背景	298
VI むすび	318
索引	323

第 1 編

経営と風土の接点

第1章 経営と風土の接点(1)

——風土概念再検討への予備的考察——

I はじめに

本章は、経営と風土の接点という問題視角から、経営(学)上の諸問題に取り組むさいの方法論的基礎を形成するための予備的考察である。経営と風土の双方の問題を対象とするにしても、筆者は、とくに風土の視角から、経営の問題を再検討し、再評価することにより、固有の立場は経営学におくとしても、経営(学)上の具体的・現実的諸問題の究明に新しい見地から貢献しようと努力するものにほかならない。しかしながら、こうした努力によって、経営(学)上の問題は、よりいっそう深く掘り下げられ、解明されると信じている。したがって、副題にある「風土概念再検討」という語句からも理解できるように、もっぱら風土の側を中心として、経営(学)の問題を考察するため、方法論的基礎の形成に関する予備的考察が、本章ではなされている。なぜ、風土の側から経営(学)の問題に取り組むかは、風土側からの視点を有し、方法論的に武装することにより、経営(学)上の具体的・現実的諸問題が、より十全な対象として把握されるからであり、後には、従来の主流的見解である経営の側での問題意識とつき合わせるにより、さらに広い視野と確実な経営学上の方法論的立脚点が獲得できると考えるからである。

こうした意図のもとに、本章は風土の問題を中核としつつ、経営の問題とも関連させて、論旨を展開していこうとするものである。したがって、論述の筋書は、風土の問題に焦点をあてて、風土概念を徹底的に棚卸して、十分に再検討、再吟味するなかで、経営の問題との関連から、とくにその場合、日本の経

営(学)を問題の対象としながら、経営と風土の接点における問題視角からの方法論的基礎を形成するための、風土概念の再構成と新展開にまで高め、到達しようとする意図の達成に必要なカギとなる序論の究明、すなわち風土概念再検討への予備的考察を行ないたいのである。

Ⅱ 風土概念について

本章で考察の対象としてとりあげる素材は、とりあえずは日本の経営の精神的ないし思想的背景を検討するさいに、組上にのせなければならない風土概念である。一般的に言って、日本の経営、あるいは日本経営学の学問としての研究は、当の日本において、日本人自らの手になるものとしては、あまり盛んとはいえない実情であろう。日本人以外の手による研究もないわけではないが、ともかくも日本人自身が、自分の周囲の考察対象となる日本の経営の現象・実相や、経営学説の究明や検討、吟味による理論的掘下げとその一応の整理といった問題に対しては、あまり十分なものが存在していないのが現実であろう。自国以外の経営や経営学、とくにアメリカとドイツのそれらに比較すると、まさによい対照といえる。

なぜ、風土といった問題や概念をとりあげ、考察し、吟味するかその理由は、以下の論述のなかで明らかにしていくが、なによりも、日本の経営や経営学そのものの理論的解明といった作業をするときに、その重要かつ有力な契機に関した方法論ともいえる基礎を欲するためである。アメリカの経営(学)やイギリスあるいはドイツ、またフランスのそれを考察する場合に、その国の哲学的思想背景や精神的構造の理解が、経営(学)の重要な問題の要因を形成することには異論がないであろう。もちろん、そのみの究明が経営学上の問題・課題を全面的に対象とし、論究したとはいえない。しかし、当面の課題は、今日まで本格的に考察対象として、十分に焦点をあてられていない日本の経営や経営学の精神的・思想的背景と、それと経営(学)との関連を、風土概念をもって接近しようとするために、当面は風土の問題に考察の中心課題を位置させ、検討を

加えることは意味があると考えている。

こうした意図から、本章は、まず対象とすべき課題の出発点の手がかりとして、和辻哲郎の風土類型論を研究することで、風土概念の検討・吟味を始めよう。和辻の風土類型論あるいは風土論に対しては各方面からの批判があり、この問題は本章が和辻の風土概念をもって考究を開始するからには、当然十分な検討を要する。しかし、その作業は和辻の風土概念の要約・紹介ののちにゆずり、さらにその展開を期したい。

和辻は、有名な著作『風土——人間学的考察——』⁽¹⁾を著わしている。和辻がそもそも風土の問題を考え始めたのは、和辻がドイツへ留学した体験に発端があったという。初めは、景観的に、風土の問題、というよりも、その印象や実感を、日本からドイツまでの船旅の行程の体験をとおして直観し、後に講義案を基礎として、『風土』を書き上げている。和辻が風土性の問題を考え始めたのは、ベルリン滞在時の、ハイデッガーの『存在と時間』の読了後であったとい⁽²⁾う。ここで、和辻において、風土の問題が明確に問題意識化し、登場するにいたった。ハイデッガーの『存在と時間』では、時間性の問題が人間存在の構造契機として活かされているのに比べ、同時に空間性が同じく根源的な存在構造の契機として活かされておらず、ここにハイデッガーの主張の限界をみる、と述べる。⁽³⁾そこでは、ハイデッガーは人間存在をただ人の存在として捕捉しただけであって、それは人間存在の個人的・社会的なる二重構造からみれば、単に抽象的な一面にしかすぎず、人間存在がその具体的な二重性において捕捉されるためには、時間性と相即されなければならないと主張する。したがって、和辻が風土の問題を自覚せしめたものは、時間性、歴史性⁽⁴⁾の問題であったともい⁽⁵⁾う。

さて、和辻は、風土とはある土地の気候・気象・地質・地味・景観などの総称である、という。この風土という概念をもって、和辻は、それを自然として問題とするのではなく、「風土」として考察するわけは、人間にとって問題となるのは、日常直接の事実としての風土がはたしてそのまま自然現象とみられ⁽⁶⁾てよいのかという問題の性質のためであるとする。我々は「風土」において我

我自身を、間柄としての我々自身を見出す⁸⁷⁾。風土における自己了解はそうした手段の発見として現われるのであって、「主観」を理解することではない。⁸⁸⁾人間の、すなわち個人的・社会的な二重性格をもつ人間の自己了解は、同時に歴史的である。したがって、歴史を離れた風土もなければ、風土を離れた歴史もないことは、人間存在の根本構造からしてのみ明らかにされる⁸⁹⁾。人間存在の空間的・時間的構造は風土性、歴史性としておのれを現わし、時間と空間との相即不離が歴史と風土の相即不離の根柢となる。風土において、人間は単に一般的に「過去」を背負うのではなくして特殊な「風土的過去」を背負うのであり、一般的、形式的な歴史性の構造は特殊な実質によって充実せられ、一言にしていえば、人間の歴史的・風土的二重構造においては、歴史は「風土的歴史」であり、風土は「歴史的風土」である。それぞれに孤立せしめられた歴史と風土とは、具体的地盤からの抽象物にすぎず、ここで問題とする風土はかく抽象せられる前の根源的な風土である⁹⁰⁾。そして、この風土にこそ主体的な人間存在がおのれを客体化する契機が存する⁹¹⁾。かくして、存在論的・存在的認識となり、また風土の型が人間の自己了解の型となる、という。こうして、和辻の考察は、特殊な風土現象の「直観」から出発して、人間存在の特殊性にはいりこもうとする。しかし、人間の歴史的・風土的特殊構造をとくに風土の側から把握しようと試み、歴史の世界の考察が真に具体性をえるためにも、風土的特性の問題は根源的に明らかにされる必要があるとする⁹³⁾。

以上は、和辻の風土の基礎理論である。ここから和辻は、自分の体験と哲学的思考と「直観」から、かの有名な風土の3つの類型を打ち出す⁹⁴⁾。それは、モンスーン・沙漠・牧場の3類型である。和辻の風土の基礎理論にもとづくおのおのの風土の人間の構造のあり方を、和辻は、モンスーン=受容的、忍従的、沙漠=服従的、戦闘的、牧場=合理的、自然的と規定する。また、モンスーンの風土の特殊形態としての日本的風土を、人工的、合理的という人間の構造のあり方を特質とするものとも規定している。すると、ヨーロッパの牧場型——ここでヨーロッパとは一応全体像としてのヨーロッパであるが——においては合理的と自然的とがむすびつくのに対し、日本の風土類型では合理的と人工的

とがむすびついている。ヨーロッパも日本も合理的という側面を有するが、自然的と人工的というむすびつきでは、それぞれの合理的な含意をまったく異にさせる結果となっている。

- (1) 和辻哲郎『風土——人間学的考察——』岩波書店、昭和10年。
- (2) 同『故国の妻へ』角川書店、昭和40年。
- (3) 同『風土』序言、1頁。
- (4) 同書、序言、1-2頁。
- (5) 同書、序言、2頁。
- (6) 同書、7頁。
- (7) 同書、11頁。
- (8) 同書、12頁。
- (9) 同書、14頁。
- (10) 同書、15-16頁。
- (11) 同書、16-17頁。
- (12) 同書、18頁。
- (13) 同書、23頁。
- (14) 以下の点について詳しくは、和辻『風土』24-120頁を参照のこと。本章では、紙面の制約上、これ以上ふれない。
- (15) 和辻『風土』76頁。

Ⅲ 風土概念の問題性

これまでの叙述に関し、あらかじめ、和辻の風土論を検討するさいに、その批判的考察以前に必要ないくつかの留意点を指摘したい。

まず初めに、和辻の風土概念自体に対する説明は、風土を自然として問題にするのではなく、「風土」として、つまり主体的な人間存在がおのれを客体化する契機として風土は理解され、そしてその契機について、さらに論述がなされているが、『風土』の冒頭での定義をみるかぎり、通り一遍のものでしかなく、それ以降での風土概念の考察や展開にもかかわらず、再定義らしいものはみあたらない。和辻の問題とする風土は抽象化される前の根源的な風土であるというが、風土概念によって他のものの説明や解釈が加えられたり、契機とされたり、手段とされたりするからには、冒頭の定義とはいえ、さらに後段との

論理的脈絡を考慮し、慎重を期すべきであろう。ちなみに、手もとの「国語辞典」をみると、風土とは「土地の状態、気候、地味など」とあり、むしろ和辻がなんらかの辞書を参照したたぐいの風土の説明が、『風土』の冒頭での叙述ではないかと思われる。

つぎに、和辻の風土論はハイデッガーから出発し、発展せしめられるかたちになっているが、経営学者のなかでも経営学研究の方法論的基礎をハイデッガーに求め、そこからなんらかの基礎を獲得しようと努力している論者がいる。それは、池内信行である。池内は『現代経営理論の反省』においてつぎのように述べている。

「社会科学は、もと歴史科学であり、ともにひとしく抽象をその武器としてもちながらも、その特質は、歴史において存在を抽象するものでなければなりません。歴史においては存在は、存在を抽象することによってはじめて理論を抽象するのです。⁽¹⁾」

「理論もまた、しゅせん、人間存在のひとつの存在の仕方にほかならないのではないか。存在において学問を基礎づけることこそ、われわれのとるべき根本の態度でなければならぬ。⁽²⁾」

和辻の風土論における主張と、池内の主張、つまりここでは社会科学としての経営学の場合の理解の仕方での主張とがきわめて類似するのは、両者ともにとくにハイデッガーにその思考上の依拠を行なう点から、いうまでもなく明白であろう。もちろん、和辻のいう風土概念と池内の「存在」の意味との関連いかんは、本章においてまさに中心的検討の題材とするものなので、ここではこれ以上言及しないが、その共通性についての指摘は十分意味のあることと考える。少なくとも、こうした哲学者と経営学者の学的関心のあり方において、共通の分母があることに注意したい。さらに、筆者も一応「風土の側から」という観点を採用して、経営学の立場に立ちつつ検討をすすめたので、風土と「存在」の関連のあり方については、少なからず関心をもっている、といえよう。筆者の理解するところでは、本章の課題は風土概念と「存在」の概念との谷間にうもれている問題を引き出し、問題化するところに第1の興味を覚え、

そのうえにそこにある諸問題を検討・考察し、吟味することが重要な仕事となる。なお、池内の主張は、上述の点では評価できるが、方法論的考察のかぎりでの評価であって、「存在」の具体的検討での内在的考察あるいは内容上の展開は十分な展開であるとはいえない。

第3に、和辻は、『風土』以後に、『倫理学』において、モンスーン・沙漠・牧場の3類型のほかに、アメリカとステップの2つの風土類型をつけ加えている⁽³⁾。しかし、この2類型はいかにもあとからとってつけたという感じが強く、『和辻哲郎全集』の解説者によれば、この2つの風土類型はロシア人とロシア文化、アメリカ人とアメリカ文化への理解の道をひらくために、初めの3つの類型との、単なる類推^{アナロジー}によって立てられたきらいがあり、その3類型でのような叙述の生彩を欠く。和辻自身がいう風土に関する「直観」が大切にされず、ただ文化圏の世界史論の展開のために、この2つの風土類型を設定している⁽⁴⁾。2つの類型は「体験」にもとづく「直観」により概念上の形成をうけた類型でないために、いささか陳腐である。ここで、ソ連とアメリカに対する人間と文化の関係があり、現実には一方では社会主義企業経営をその体制にかかえるソ連経済と、他方での資本主義的経営の一典型であるアメリカ経済における企業について、一言すれば、より大局的な見地に立つと、体制をひとまず重視しない意図の形式での「比較」経営学と、またたとえば、資本主義なら資本主義という同じ体制下にある各国企業経営の「比較」経営学とが考えられよう。前者は、まだ、かなりの問題と検討を残しているのもこれ以上の言及はできないし、また本章の考察の関心外でもあるので、当面の観点に関しては、後者においてさらにせばめて、課題が日本の経営や経営学の考究に存するゆえ、米、英、独、仏などの区別は直接には問題にせず、それらを欧米として一応ひとまとめにして考察するなかで、日本の経営や経営学と欧米の経営や経営学全般とを比較する研究方法を、ひとまず採用することになる。しかし、この比較経営(学)の課題も本章で直接とりあげる内容ではないことを断っておきたい。

今のところ、「比較」経営学に関する日本の著作としては、田杉競・鈴木英壽・山本安次郎・大島国雄⁽⁵⁾『比較経営学』がある。序文で山本安次郎はつぎの

ように述べている。

「比較経営学の見方によって、それぞれの国の経営学の特質を析出し、これを根本から解明することは、それ自体極めて重要な意義をもっている。……思うに、比較経営学は経営学の相異性比較即同一性比較、同一性比較即相異性比較として根本的批判を意味し、古いものの破壊、新しいものの創造への意向を示すものである。そして同一性比較が強調されるか、相異性比較に重点がおかれるかは、時と場合、問題の性質や研究目的によって異なる。けれども結局は同一性比較即相異性比較でなければならない。⁽⁶⁾」

こうした意図は、きわめて適切であり、的を射ている。しかし、『比較経営学』の内容は、その意図を満足には達成していない。「比較」の材料は、アメリカ、ドイツ、フランス、ソ連などの各国経営学として簡潔にまとめあげられているが、これらはあくまで材料でしかなく、相互の「比較」的考察の水準までそれらの素材が有効に利用されていない。そのかぎりでは、その方法論的ともいえる意図は成功しているとはいえない。参考までに、つぎの山本の記述もみておきたい。和辻の風土概念、池内の「存在」の概念とみくらべてほしい。

「それ(経営全体——筆者注)は、時間の空間化と同様に、空間の時間化といわねばならない。そして、真の経営全体とは正にかかる時空的構造の統一として考えられるのである。⁽⁷⁾」

日本に相對して欧米をすえる理由は、さしあたり、各国経営(学)の比較研究が必要としても、ここでは遠近法により、ヨーロッパにおいては独、英、仏を含めしめ、さらに欧と米とを一緒にして、欧米と総括しようという考えによる。したがって、欧米——日本も含めて——の各国の経営(学)の比較ではなく、日本の経営(学)と欧米の経営(学)の二者の比較が第1の課題となるのである。日本と欧米に対応する風土類型は、モンスーンの特種類型としての日本の風土と牧場型風土である。日本の風土類型は、かなり限定されたものであるのに対し、欧米の風土類型はやや大味の感をまぬかれえないが、ここでの考究の範囲と努力内では、十分有効な類型の組合せと考える。ここで、牧場型の風

土を欧「米」にあてるには疑問、との批判が生じるであろう。しかしながら、さきほどの和辻の追加したロシアとアメリカという2つの風土類型の問題もさることながら、本章での問題であるアメリカの風土類型は、アメリカ文化の性格が本質的には近代ヨーロッパを他の諸地域に、さらには全世界に優越させた原理としての合理主義的な技術文化となによりも行動的な経験主義とが、新大陸に新しい環境への適応の過程で、無拘束に自由に自己を実現することができた成果にほかならない⁽⁸⁾。こうした理由から、また筆者が本章でひとまずとる遠近法と相俟って、米は典型的にヨーロッパ的であり、ヨーロッパの延長線上の存在であると指定するのである。それゆえ、米にヨーロッパの風土を一応あてがうのである⁽⁹⁾。

第4に、ヨーロッパでは合理的と自然的とがむすびつくのに対し、日本では合理的と人工的とがむすびつくと各風土類型を特徴づける和辻の主張に関しては、疑問が生じると思う。つまり、それはヨーロッパと日本の風土における人間の自然に対する態度、いいかえれば自然への対峙の仕方のちがいに関係する点である。ヨーロッパでは、人間が、自然と自己とを明確に分離してとらえるのに対し、日本では、人間が自然と自己を混同的にとらえる、と常識的に理解されることから、ヨーロッパのほうが自然を明瞭に別個のものとしてまず自覚するので、むしろ人工的であり、日本のほうは自然に人間がとけこむという模様を呈するのであるから、自然的ではないのかという疑問である。だが、ヨーロッパのほうは、自然を自然そのものとして客観的に対象化して把握するからこそ、自然であり、自然的といえるのに対し、日本のほうは、一体的に自然のなかで自己を混体物として把握するために自然と人工を別個に把握できなくなり、その結果、人工が深くからみあった自然を自然として理解するので、人工的であるしかない、ということになる。すなわち、自然に対して人工が存することは、ヨーロッパ、日本とも変わりはないが、自然を一度自然そのものとして把握する過程の操作を経るか否かに、その風土の自然のとらえ方のちがいがあり、双方ともに、自然に人工を加えることには差異はない。しかし、その対応ないし取組み方が双方のちがいを生むわけである。